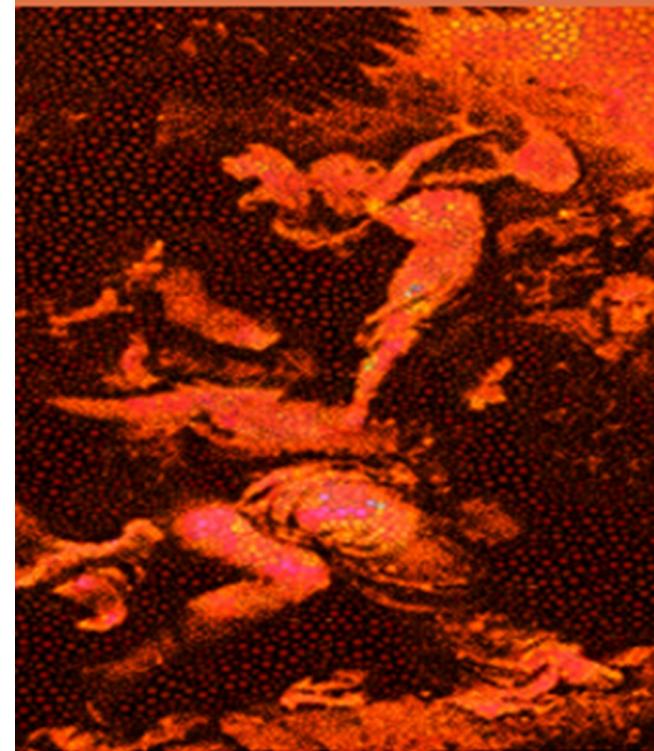


戯曲「ファウスト第一部」上

F A U S T · 2



正道 S E I D O U

目次

戯曲「ファウスト第二部」上

はじめに

第一幕

1 花咲き乱れる大地

2 皇帝の居城

3 仮面舞踏会

4 遊園

5 暗い廊下

6 明るい広間

第二幕

7 かつてのファウストの工房

8 ワーグナーの工房

9 古典的ワルブルギスの夜

10 前と同じペネイオス河上流のほとり

11 エーゲ海の岩の入り江

26 24 21 18 17

13 10 9 7 5 5 3

戯曲
「ファウスト第一部」
上

はじめに

第一部に続いて、ここに「ファウスト 第二部」を配信します。戯曲の形式である上に、要約版ですか
ら、馴染みやすいこと請け合いでです。

今回も相良守峯氏の訳を底本としていますが、第一部のときほどの文章改ざんは行っていません。起
承転結が透けて見える第一部とは異なり、特徴的なエピソードの積み重ねである第二部に対しても、そ
れぞのエピソードを丁寧に要約するしか、全体を短縮する術がなかったからです。

とはいってもと原本に忠実だろうという義務感は持つていなかつたので「ここは少し変えたほう
が流れがいい」と思った文章に対しては、ためらいもなく変更を強いました。その点はご容赦を乞うし
かありません。

なお、第二部のストーリーは、グレートヒエンを牢獄から救い出せなかつたファウストの落胆から始
まります。その落胆を、自然の力をかりて克服することが、第一部のプロローグであるのです。

第一幕

1 花咲き乱れる大地

花に埋もれるようにして横たわり、疲れて眠っていたファウストが目覚める。

ファウスト 命の脈拍が、新たに生き生きと打ち始める。大地よ、お前は日々変わることなく、俺の足もとで呼吸をし、歎びをもつて、この体をとり囲む。そして、俺を動かして力強い決心をさせるのだ。最高の存在に向かって、絶えず努力を続けるようにと。

〔ファウスト、上空を眺める〕

ファウスト 遠くに虹が見える。この虹こそは、人間の努力を映す鏡だ。あれに思いをいたせば、よく分かる。人生は、彩られた映像としてのみ掴めるものだと。

〔ファウスト、起き上がって新しい人生のステージに踏み出す〕

2 皇帝の居城

皇帝が王座につくところ。その右に天文博士が立つ。周囲には貴族たち。

皇帝（周囲を見渡して）賢い博士はわしの傍にあるが、あの道化は一体どこへ行ってしまったのか？

天文博士 あいつは階段で倒れました。誰かが奴を担いでいきましたが、死んだのか酔っぱらっただけなのか、私には一向に分かりません。あの道化が倒れたことだけが確かです。

貴族の一人 すると、不思議なほどに素早く、道化の代役を買ってきました奴めがおります。

メフィスト それが私めにござります。

皇帝 どうやら以前の阿呆は、遠い所へ行ってしまったらしい。そちが代わりを務めるというなら、ま

あよし、わしの傍におるがいい。

「メフィスト、段を上って、皇帝の左側に立つ」

皇帝（皆に向かって）ところで、わしは今日、日々の雑事を忘れて、陽気な仮面舞踏会を開こうと考えておつたのじや。だが、そちたちが「どうしても」と申すから、こうして評定を開くことにした。では意見がある者は申し述べるがよい。

宰相 今この国は大変なことになつております。告訴人が法廷に押しよせ、一揆の騒ぎは次第に大きくなっています。そればかりか、民衆の大波が、猛り狂いながら宮殿に押し寄せてきているのです。

天文博士 かくて世の中は秩序を失つてバラバラになり、秩序に従つている者のほうが無価値のようには扱われております。

宰相 いまや決断が必要でござります。みんなが加害者であつたり被害者であつたりしては、皇帝の尊厳さえも失われてしまいましょう。

大蔵卿 とはいえ、皇帝陛下が湯水のように国庫の金を使い、それを回復させるため、あまりにも多くの権利を手放してしまいました。それにより、もはや政府には、なんの権利も残されてはいないのでござります。

天文博士 つまり、もう国庫は空っぽということです。

宮内卿 毎日節約を心がけているのですが、実際には、毎日支出が増えていくのです。とうとう葡萄酒までが不足してまいりました。以前は蔵に樽の山が積まれていましたが、貴族の方々が底なしに呑まれるので、もう最後の一滴もない始末でござります。

皇帝（皮肉をこめてメフィストに）どうだ新しい道化、お前も何か、わしに難儀を申し立ててみるか？

メフィスト いえ、とんでもない。私が申しますのは、むしろ皆さまへの福音です。

皇帝 福音？ 何じゃそれは？

メフィスト では述べさせて頂きましょう。そもそも、お金というものは、知恵の力によって、どんな深いところからでも掘り出せるものなのです。で、いま何がその金を掘り出してくれるのかと尋ねますならば、天分を持った高い精神であると申し上げましょう。

皇帝 よく分からんが、こうせよああせよという注進は聞き飽きてる。そういうものなしに金を作れるというなら、よいわ、お前が金を作るがいい。

メフィスト ご入用なものは作りましょう。ご入用以上に作りましょう。すべての宝は地下に埋まっています。土地は陛下のものゆえ、宝もまた、陛下が所有されるべきです。

皇帝 なら急いでやれ。利口な阿呆よ、もうお前を離しはせぬ。お前の泡みたいな嘘が本当である証拠を見せよ。

メフィスト 黄金や宝石は、暗闇のなかに隠れております。白昼にものを認識するなど子供だましに過ぎません。神秘というものは、闇の中にこそ棲んでいます。

皇帝 だが値打ちのあるものは、明るみに出さなくてはならん。その、どっしりと金貨のつまつた地下の壺を、お前の鋤でもって、明るみに掘り出してこい。

天文博士（メフィストに操られて喋る）陛下、そのように性急な欲望はおしづめなさいませ。まずは華やかな遊戯を先にいたしましょう。心を落ち着かせないと、目標を達することが出来ませぬ。奇跡を願うものは信仰を強むべしです。

皇帝 では愉快な遊びで時を過ごすことにしよう。都合よく灰の水曜日が近づいている。それまでの間、いつもよりも賑やかに、思う存分、謝肉祭を祝うことにしよう。

3 仮面舞踏会

広大な広間。大勢の客がおり、舞踏会のために周囲が飾り立ててある。客はすでに飲食や舞踏を楽しんでいたが、そこに大きな異変が生じる。

布令役 みなさん、あの大勢のなかを突っ切って進んでくる、四頭立ての立派な竜車が見えますか？車を曳いた竜が、鼻息あらく突進してきます。道を開けないと危ないです。私も身震いがします。

少年御者（竜の手綱を握りつつ）止まれ竜よ、翼をひかえろ。私がお前を抑えるように、お前は自分を抑えろ。

布令役（少年御者をみて）お前さんは、若くって美しい、大人になりかけの少年だね。

少年御者 そう見えるのならそうなのだろう。では、この車の玉座に乗っておられる、輝くように立派なお方は誰だと思う？

布令役 富貴で慈悲ぶかい王様らしいね。施しをするという清い楽しみは、ご自分の財産を守ることよりも優っているとお考えでしよう。

少年御者 この方は実は、富貴の神と呼ばれるプルートゥス様なんだ。こうして立派な装いでお出ましになつたのは、こちらの皇帝陛下の懇請によるものだ。

〔少年御者が、竜車の至るところを指ではじき始める〕

少年御者 こうすると、ほら真珠の首飾りが出てきただろ。お取りなさい、今度は金の首飾りにイヤリングだ。

布令役 さつそく大勢の人々が掴むわ、取るわ。もう施し手が身動きならなくなるよ。でもまだ、まるで夢のように、指で宝石をはじき出しつづけてら。

プルートゥス（＝仮装したファウスト）少年御者よ、お前はいつでも私の心に適うように働いてくれる。（そう言いながらプルートゥスが車から降りる）

布令役 車から降りると、いかにも堂々とされている。合図をなさると、竜どもが動き出して、黄金をつめた箱を、あの方の足元に据えました。

プルートゥス いよいよ宝物の縛めを解くときがきた。そうれ開いた。ごらん、真鍮の箱の中のものが現れて、黄金が煮えたぎっているのが露になつたぞ。私は、これを撒き散らしてやるのだ。

〔プルートゥスが、柄杓で液状の黄金を撒き散らす。黄金は、中空で金貨に変化する〕

群衆の叫び声 鑄たてのドゥカーテン金貨が飛び出した。見ていて胸がドキドキする。欲しいもののがいくらでも出てくる。

〔誰もかれもが、我先にと金貨を掴もうとする。そのため広間全体が混乱に陥る〕

布令役 頭の悪い人たちだ。気の利いた絵空事が、そのまま現実だと思つていなざる。仮装舞踏会の王

様、仮面をかぶったプルートウス様、この低能な連中に少しばかり灸をすえてやつてください。

プルートウス（布令役が持っていた杖を奪つて）では、こいつを借りよう。これを早速、煮えたぎつている黄金の箱の中に突つ込むのだ。そうすると大いに燃えたぎる。（杖を振りながら）杖はもう真っ赤になつてゐるのだ。あんまり私の近くに寄る者は、すぐに炎の餌食になるぞ。

悲鳴と混乱 こりや堪らん。逃げられる者は逃げろ！（大変な騒ぎになる）

布令役 至るところで叫ぶのが聞こえるぞ。まさにパニックだ。いい氣味だが、その中に「皇帝が遭難された」という言葉が混じつてゐる。これだけは間違いであつてくれればよいが。

プルートウス ハハハ、恐怖はもう十分に広まつた。そろそろ救いの手を差し出さなければ。たくさん水気をふくんだ霧よ、火に焼けてごつたがえした人々を覆つてやれ。

〔人々が霧のなかに包まれていく。そのように真っ白な情景が現れてから暗転〕

4 遊園

仮面舞踏会の翌朝。皇帝ならびに廷臣たちが揃つてゐる。そこにファウストとメフィストも加わつてゐる。兩人とも礼に適つた服装。皇帝に跪いてゐる。

ファウスト 陛下にあらせましては、昨日の焰の戯れをお赦しくださいますか。

皇帝 二人とも立つてよいぞ。わしはああいう戯れが大好きなのだ。炎をまとつたわしは、まるで幾千のサラマンダー（火蜥蜴）の王のようであった。

メフィスト じつさい陛下はそれでいらっしゃいます。地水火風ことごとく、陛下の権威を絶対のものと認めてゐるのですから。

皇帝 うむ。千夜一夜物語から抜け出したかのようだ。お前たちがここにやつてきたのは、本当にんという幸運であろう。よくあることなのだが、この現実の世界がつくづく嫌になつたときには、お前た

ちを呼び出すことにする。そのつもりでいるがいい。

宮内卿（急いで登場）陛下、私は一生のうちに、こんな無上の幸福を奏上いたそとは思いもよりませんでした。と申しますのは、勘定がどれもこれも払い済みになり、高利貸しの爪牙を丸めることができます。たのです。たとえ天国に行つても、これほど晴れ晴れしい思いは出来ますまい。

軍部卿（続いて登場）未払いの給料を片付けることが出来ました。兵士たちは新鮮な血がめぐるような思いをしていることでしょう。街をみれば、酒場の亭主や女どもまでいい景気です。

皇帝 お前たち二人とも、胸広々と息をしているな。皺がよつた顔も、まことに晴れやかに見える。

宮内卿 そうであつて当然です。店では反物を着る。仕立て屋はそれを縫う。地下の酒場では皇帝万歳の声で沸き返り、煮たり焼いたり、お皿をガチャつかせたりしています。

メフィスト 今後はご領内の至るところ、黄金や宝石に不足する心配はございません。

皇帝 わが国は、お前たちのおかげで非常に大きな幸福に与かつた。出来るなら、その功労にふさわしい恩賞をどらせたい。尊い役職を与えるから、それを楽しんで果たしてほしい。

大蔵卿 私たちは、この二人といしさかも争いません。今回のことでの分かりました。魔法使いを同僚にもつことはよいことです。

5 暗い廊下

ファウストがメフィストの腕を引っぱりながら歩いている。

メフィスト 何だつて、こんな暗い廊下に引っぱってきたんですか。

ファウスト 大変な仕事が出来たのだ。皇帝が、ヘレナとパリスを見たいと言い出したらしい。まったく急な話だが「それぐらい魔法使いならば、すぐに出来るだろう」とな。それを私は、宮内卿と侍従からせつつかれている。

メフィスト ヘレナとパリスというのは、あのギリシア神話の美男美女ですか。

ファウスト そう。トロイア戦争の原因となつた、美しき人妻と有名な情夫だ。要するに皇帝は、男女の理想の姿を、自分の目で見たいということなのだ。さっそく仕事にかかってほしい。命令には背けないから。

メフィスト 軽はずみな約束をされちゃ、こっちも困りますよ。

ファウスト これは必然のことだ。皇帝を金持ちにしてあげたからには、今度は慰めを提供しなければならないのさ。

メフィスト あなたは、そんなことが簡単に出来ると思つてるんですね。

ファウスト なに、君が一言呪文を唱えれば出来ることだろ。私がわき見をしている間に、君が二人を連れてくるという寸法だ。

メフィスト まつたく……そもそも私はゲルマンの悪魔で、向こうはギリシアの亡靈なんです。そこには何の関わりもありません。つまりは異教徒同士ですから、あれはまた別種の地獄に住んでいるんです。まあ、一つだけ手段はありますけど。

ファウスト それを今すぐに聞こう。

メフィスト この深遠な秘密は、本当は誰にも打ち明けたくないんですが、まあ、あなたが相手では仕方ありません。

ファウスト うむ。

メフィスト えー、ある寂しいところに、やんごとなき女神が座についております。そこには場所もなければ、まして時間もない。だから、この女神については、語ることも難儀なんです。それは母たちなのです。

ファウスト（愕然として）母たちか。

メフィスト ゾッとしたか。

ファウスト 母たち、母たち……不思議な名だなあ。

メフィスト 事実不思議なものなんです。人間には知られず、私どもも、その名を呼びたくない女神たちです。その住処に行くためには、いわば彼女らの子供になるしかありません。

ファウスト ……そこまでの道筋は？

ファウスト 道なんかありません。誰が願つても、達せられたことのない場所です。ただ寂しさに迫り回されるんです。永遠に空虚な境には、何一つ見えるものはありません。ご自分の足音も聞こえないし、腰を下ろそうにも固いものがあります。

ファウスト か……構わん、私は行こう。君のいう空虚のうちに、私は目的の一切を見出すつもりだ。

メフィスト では、この鍵をお取りなさい。

ファウスト こんな小さな鍵が何だというのだ？

メフィスト この鍵が、正しい場所を嗅ぎつけてくれます。それに付いていけば、母たちのところへ行けるんです。

ファウスト（身震いして）母たちのところへ……聞くたびにギクリと堪える。こんなに嫌なふうに響くとは、なんたる言葉だろう。

メフィスト では、すでに出来上がっているものから逃れて、形態を生み出す深淵へとお行きなさい。三本足の香炉が見えてくれば、目的の場所まで達したことが分かります。香炉の明かりで母たちも見えることでしょう。

ファウスト 彼女たちは何をしているのか。

メフィスト 永遠なる意味の永遠なる遊びで、彼女らの周りには、あらゆる被造物の形態が漂っています。彼女たちは、形態を生み出す母胎なのです。でもあなたは香炉のほうを向いてください。そして、鍵で香炉を触るのです。

〔ファウスト、鍵で何かに触れるような仕草をする〕

メフィスト それで結構です。すると香炉は、忠実な下僕のように、あなたに従つていきます。母たちが気づかぬあいだに、あなたは香炉を持って戻つてこられるんです。ひとたび現世にそいつを運んできてしまえば、あなたは昔の英雄でも、美人でも闇の国から呼び出せるんですよ。

ファウスト で、今はどうするんだ。

メフィスト 鍵を固くにぎり、心をこめて降りようとしたじなさい。そうして強く足踏みするんです。

ファウスト こうだな。（足踏みしながら異界に沈んでいく）

6 明るい広間

皇帝、貴族、メフィストがいる。

侍従（メフィストに） ヘレナとパリスを見せてくださるはずでしたね。陛下がお待ちかねです。

宮内卿 皇帝陛下は、貴族みなに見せてやると約束したのです。ぐずぐずしていると、陛下のご体面にもかかわります。

メフィスト そのために連れが出来ているんです。やつはやり方を心得ていますので大丈夫です。

宮内卿 どんな術がいるかは問うところでない。陛下はただ、早く仕上げろと仰せなのだ。

メフィスト（独白）母たちよ、母たちよ。早くファウストを歸してくれ。（何かに気づいて）おや、広間の燈火が薄暗くなってきたぞ。

〔ファウストが床からせり上がりてくる〕

天文博士 不思議の術者が現れた。うつろな暗闇から、三本足の香炉が、一緒に昇ってくる。これからはきっと、うまく事が運ぶだけのことなのだろう。

ファウスト（莊重に場を司る）永遠の寂靜境に住まわし母たちよ、われ、御身たちの名のもとに、これを執り行う。皇帝の希う、摩訶不思議なものをお見せする。

天文博士 灼熱した鍵が香炉に触れたかと思うと、もうもうたる靄が、たちまち広間全体に広がる。す

ると音楽が聞こえ始め、美しい若者が足拍子をとりながら現れました。この若者の名は言うまでもないでしょ。

「パリスが登場。貴族の婦人たちが、その美しさの虜となる。続けてヘーレナも登場」

メフィスト こいつが絶世の美女といわれたヘーレナなのか。これなら俺は平気だな。キレイはキレイだが、俺の趣味には合わない。

天文博士（興奮して）これほどの美女が現れでは、千の舌があつても賛辞が追いつかない。あれを見せられたら、誰でも呆けてしまう。

メフィスト（ヘーレナを見て）おお、俺にとって世界は、今はじめて好ましいものとなつた。俺が一切の情熱を、愛情、崇拜、狂乱を、挙げて捧げるのはお前に對してだけだ。（興奮の極みに達する）

メフィスト（メフィストの背後から）しつかりしてくださいよ先生。自分の役割を忘れちゃいけません。聴衆のひとり おや、ヘーレナが身をかがめましたよ。下のほうから、パリスの息を吸おうとしています。うらやましいな。ああキスをする。もう沢山だ！

メフィスト ヘーレナ、そんな小僧めに、なんという情けをかけるのだ！（衝動的に動き出す）

メフィスト あなたは動かないで。幽霊の勝手にさせておきなさい。

天文博士 パリスは大胆な英雄となつた。ヘーレナを抱きしめると、もう女は抵抗することも出来ない。パリスは腕に力をこめて、ヘーレナを高々と抱き上げる。攫つていくつもりだろうか。

メフィスト（パリスに）大それたタワケ者めが！ 馬鹿な真似をしおつて。俺の話を聞け。待つんだ、あんまりだぞ！ い、いや、この鍵が、俺の手のうちにあるではないか。

「メフィスト、ヘーレナとパリスに近づいていく」

メフィスト ヘーレナよ、俺がお前を救つてやろう。するとお前は、二重に俺のものになる。母たちよ、俺の決断を尊重してくれ。一度ヘーレナを見知った男は、もはや彼女から離れることが出来ないのだ。（ヘーレナに抱きつく）

天文博士 何をするんですメフィストさん！ そんな風に、力づくで女を掴まえるものではありません

ん。ああ、もうヘレナの姿がぼんやりしてきた。今度はパリスのほうに鍵を差し向けたぞ。若者に触れる。や、大変だ。危ない、しまった！

〔鍵がパリスに触れた瞬間、爆発が起こる。ファウストは地上に倒れ、ヘレナとパリスの幽霊は、煙霧となつて消える〕

メフィスト（意識のないファウストを担いで）まったく、馬鹿な奴を背負い込むと、悪魔でさえ損をするわい。

第二幕

7 かつてのファウストの工房

鍊金術師の工房。古めかしいベッドに横たわっているファウスト。傍にメフィストが立つ。

メフィスト ここで寝ているがいい。ヘレナに魅入られた男は、なかなか正気には戻らん。

「ファウストに起きる気配はない。メフィストは工房のなかを歩きながら語る」

メフィスト どこを見回しても、こいつと初めて会った時とままだ。あのときファウストが着ていたコートまで壁に掛かってる。何となれば、こいつを着て、大学を歩いてみたいぐらいだ。先生として威張つてみたい、そんな茶目っ気が、この胸のうちに湧いてきたぞ。

「工房に隣接した大学に向かって歩いていくメフィスト」

メフィスト 今日の俺は先生さまだぞ。だが、そう名乗ってみても、誰もいないんじゃ張り合いがないな。俺を認めてくれる人間が、どこかにいないかな。（大学の入り口の呼び鈴を鳴らす）

「呼び鈴の音を聞きつけた、かつてのファウストの助手が、よろめきながら駆けつけてくる」

助手 や、これはなんだ。大きな男が、ファウスト先生の古いコートを着て立っている。氣味が悪いなあ。

メフィスト こっちへ来たまえ。君はニコデームスといったな。

助手 よく私の名前を存じで。

メフィスト そりや知つてるとも。君は年をとっても助手なんだね。だが今の君の先生、あれは立派な学者だね。碩学ワーグナー先生を知らぬ者はないだろう。なにしろ一流の鍊金術師だからね。

助手 前の大先生が雲隠れなさってから、ワーグナー先生は、なんとも気持ちが晴れない様子です。大先生のお帰りこそ、ご自身の慰めとも幸福とも思つておいでなのです。それでお部屋も、ファウスト博士がおられた時のままなのです。

メフィスト その殊勝な君の先生はどこにおられるのかね。私を案内するなり、彼のほうをここに連れてくるなりしたまえ。

助手 ワーグナー先生は、偉大なお仕事のために、ここ幾月かのあいだ、ご自身の工房に閉じこもつておられます。そこには助手以外は入ることが出来ません。

メフィスト だが私が入るのを拒むのは大損だぞ。私は始原の靈力によつて、困難な仕事の成就を早めあげられる男なのだからな。

8 ワーグナーの工房

ワーグナー博士の工房。あるいは実驗室。空想的な目的のための、雑多な機械が並んでいる。火のついた竈のまえにワーグナー博士がおり、その火でフラスコが温められている。

ワーグナー フラスコのなかの、ずっと曇つていた部分が急に明るく冴えてきたぞ。レトルトの中心部に、明るく白い光が現れた。今度こそは取り逃がしたくないものだ。おや、戸口をガタガタさせているのは誰だ？

メフィスト（登場） こんにちは。お役に立ちたいと思つてきました。

ワーグナー おいでなさい。よい星回りです。でも物をいわず、息を殺していくください。偉大な試みが、いま成就しようとしているのです。

メフィスト 何をしているんですか。

ワーグナー 人間を造つているんです。

メフィスト 人間ですって？ 一体どんな恋人同士を、その小さなフラスコの中に閉じ込めてあるんですか。

ワーグナー とんでもない。これまで流行していた生産法は、くだらぬ茶番だと我々は考えているんです。動物などは、今後もああいうことを楽しむかもしません。しかし万物の長である人間は、もっと

ずっと高尚な生まれ方をしなければならないのです。

〔ワーグナー、竈に向かって興奮しながら語る〕

ワーグナー 光ってるな。ごらんなさい、もう見込みが立ちました。塊が動いて人の形を取り始めた。もう出来上がるに違いない。ほら、可愛らしい小さな人間が、気のきいた姿で身振りする。それはやがて音声になる。言葉になる。

ホムンクルス（フラスコの中からワーグナーに）これはお父さん、機嫌はいかがですか。さあ、私を優しく抱きしめてください。けれども、あんまりきつくなべと、フラスコが壊れてしましますよ。

〔ホムンクルス、メフィストの存在に気付く〕

ホムンクルス（フラスコの中から）いたずら者の叔父さん、あなたもおいでですか。あなたがお出でになつたのは、まことによい巡り合わせでした。ゆっくり挨拶を交わしたいところですが、私も存在することになつた以上、働かざるを得ません。

メフィスト 働きたいというなら、では、あそこでお前の才能を示してくれ。（窓ガラスを通して、ファウストの工房のほうを指さす）あいつの目を覚まさせたいのだ。

ホムンクルス（驚嘆して）ああ、私には彼の夢が見える。これは本当に大した光景だ。

〔フラスコがワーグナーの手をすり抜け、ファウストの上方にまで飛んでいく。ホムンクルスの光が、優しくファウストを照らす〕

ホムンクルス この夢の景色はギリシアのものだ。これはレダの物語だろうか。白鳥の王が、なれなれしく王妃に擦り寄っている。女王も悪い気はしないらしく、彼女はやがて白鳥の卵を産むことになる。その卵から、あの美しいヘレナが生れてくるのだ。

メフィスト（追いついて）そんな小さな体で、たいした空想家だ。俺には何も見えないが。

ホムンクルス あなたは中世ドイツの存在でしょう。そのあなたに、ギリシアの神代の世界が見えるはずがありません。

〔ホムンクルス、ファウストの工房を見渡してため息をつく〕

ホムンクルス カビの生えた茶色い石壁が、曲がりくねって、低くのしかかっている。こんな場所で目を覚ましたら、ギリシアの美を見ていたこの人は、ガッカリして即死してしまうことでしょう。それはいけない。ならばいっそ、今この人を、ギリシア世界へと連れていきましょう。

メフィスト ほう、そういう手も悪くないな。

ホムンクルス 今日はちょうど、古典的ワルブルギスの夜にあたります。今なしうる一番の良策は、そこにこの人を連れていくことです。

メフィスト そんな祭のことは聞いたことがないなあ。

ホムンクルス あなたが知っているのはロマンティック（浪漫派）な幽霊ばかりです。でも本当の幽霊は、やはりクラシック（古典派）でなければなりません。

メフィスト で、どうすればいい？

ホムンクルス あなたが着ているコートをお貸しなさい。それを、ここにいる眠りの騎士にかけてやるんです。そうすればコートが、騎士とあなたを運ぶでしょう。私が先立ちして照らしますから安心してください。

ワーグナー（ようやくファウストの工房に着いて）それで私は？

ホムンクルス あなたは家にいて下さっていいのです。そこで古い羊皮紙本を開いて、念入りにあれやこれやを調合してください。その努力には、相当の報いが与えられるはずです。黄金に名譽、健やかな長寿などです。ではご機嫌よう。

ワーグナー（寂しそうに）御機嫌よう。これではガッカリしてしまう。お前とは、もう一度と会えないような気がするなあ。

9 古典的ワルブルギスの夜

ファルサロスの野、うごめく魑魅魍魎たち。上方に飛行する者たち（先導するホムンクルス、コートに包まれたファウスト、それに捆まるメフィスト）。

ホムンクルス もう一度旋回して飛びましょう。低地や谷間は、あまりにも密になっていますから。本当に地上は、燈火や氣味の悪い妖怪たちでいっぱいです。

メフィスト ドイツのブロッケン山と同じように、ここにも、胸糞の悪い化け物どもがたくさん見える。ドイツ悪魔の俺としては、何とも居心地がいいわい。

ホムンクルス あそこに人気のない場所がありますから、そこに私たちの騎士を降ろしましょう。そうすれば彼は、すぐに甦るはずです。昔話の国に、自分の生き筋を求める人ですから。

〔ファウストを地上に降ろす。そのとたんにファウストが目覚める〕

ファウスト あの女はどこにいる？

ホムンクルス（苦笑して）それは分かりませんが、たぶんこの地で知ることになるでしょう。夜が明ける前に、燈火から燈火へと探し回つてごらんなさい。

メフィスト 私もここでやりたいことがある。どうも最良の方策は、めいめいが各自で冒険を行うということになりそうだ。

ホムンクルス そうですね。ではさあ各々、新しい不思議を見つけにいきましょう。

〔ファウスト、メフィスト、ホムンクルス、めいめいが別方向に進んでいく〕

ファウスト 奇跡によつて、俺は今ギリシアに来ている。ここがギリシアであることはすぐに分かった。どんな奇怪なものが群れていよども、俺は真剣にこの迷路を探し回らずにはいられない。（退場）

メフィスト 実際に燈火を一つずつ巡つていくと、俺はまったく余所者なんだという感じがしてくる。な

にせみんな裸で、たまに肌着姿がいるだけなんだから。こっちだって行儀がいい訳じゃないが、古代の連中は、あまりにも肌を見せすぎるよ。

スフィンクス（メフィストに） お国では色々と楽しみがあるんでしょうが、ここはどうもお気に召さないようですね。

メフィスト お前も上半分はうまそな体つきだが、下の方は獣で、恐れをなすなあ。

ファウスト（メフィストの隣に現れて） いいや、実にすばらしい。観賞するだけでも、俺は満足してしまう。みつともないものにすら、偉大にして逞しい面影がある。（スフィンクスについて） こういうもの前に、昔オイディップスが立ったのだ。

メフィスト なるほど、恋人を探しにきた土地では、化け物でも歓迎する気になれるんですね。

ファウスト（スフィンクスに） ちょっと尋ねるが、ヘレナを見たことはないか。

スフィンクス ケンタウルス族のヒーロン先生にでも尋ねるといいわ。あの方は、この祭の間ずっと会場を駆け回っています。それを引きとめて尋ねられたら大成功だわ。

ファウスト ありがとう。（スフィンクスの前から立ち去る）

〔ペネイオス河のほとり。沼沢と二 nymphたちが散見される場所〕

ファウスト 幸運が、早くも俺を訪れるのか。馬と一体になって、知勇兼備の者が早駆けでやつてくる。ちょっとヒーロンさん待ってください。話があるんです。

ヒーロン どうしたのだ。私は休む訳にはいかないから、この背に乗るがいい。そうすれば随意に喋ることができる。

ファウスト（背に乗って） あなたは、ご自分の時代で最大の英雄たちに接し、半ば神のごとく誠実に人生を送られた方だ。そんなあなただから、是非この背に乗せた、最も美しい女性の話をしてももらいたい。

ヒーロン うーむ、美は、それ自身だけで満足しがちなものが、愛嬌があつてこそ、初めて抗いがたい魅力が生じる。丁度私が乗せてやつたヘレナのようにな。

ファウスト おお、あなたが乗せたのですか？

ヒーロン そうだ。この背中にだ。ヘレナはいかにも可愛く、如才なく、しかも品を失わないのだ。実に愛嬌があった。若いのに老人をも喜ばせた。

ファウスト それを、あなたは昔に見られたのですね。同じものを、私は昨日見たのです。もう私は、心も体もがんじがらめにされてしまった。彼女が手に入らないならば、もう生きてはいられません。

ヒーロン なかなかに狂気じみているな。だが、そんな君にとって幸いなことがある。というのは、私は毎年、医術に長けたマントーのところに立ち寄ることにしているのだが、君も少しばかり彼女のところに逗留すれば、薬草の力で、その狂気をすっかり治してもらえるだろう。ほらマントーの姿が見えてきたぞ。やあマントー。

マントー（ヒーロンに）このお方は？

ヒーロン 彼は、ちょっと気が狂っていて、ヘレナを手に入れたいなどと無茶を言うのだよ。つまり他の誰よりも、君の治療を必要とする男なんだ。

マントー あら、そういう不可能なことを望む人って、私は大好きよ。

ヒーロン ならば君に任せよう。

〔ヒーロン、ファウストを降ろして、すでに遠くへ去ってしまっている〕

マントー（ファウストに）私の神殿にお入りなさい、向こう見ずなお方。きっといいことがありますから。というのも、神殿の暗い廊下が、ペルセフォネーのところにつながっているのです。

ファウスト つまり、あなたの神殿から、死者の国へと降りていけるのですね。

マントー なにしろ私は、オルフェウスのことも、ここからそつと冥界に入れてあげたのです。一説によればですけれどもね。とにかく、あの人よりも上手くやりなさい。さあ、元気よく。（二人で神殿の廊下を降りていく）

10 前と同じペネイオス河上流のほとり

そこを歩いているメフィストが何かに気づく。

メフィスト 茂みのそばを慎ましやかに、光りながら通っていく球があるな。うん、あれは間違いないくホムンクルスだ。おい小さいの、どこから来たんだ？

ホムンクルス 何処とも言い難いのですが、ともかく私は、最上の意味において「出来上がりたい」んです。そうして何とかガラスを破って、フラスコから出ていきたいと思っています。そのために、あちらこちらをさまよい飛んでいるんです。

メフィスト ヘえ、出来上がりたいと来たかい。

ホムンクルス あなたには内々で打ち明けますが、私は今、二人の哲学者の跡をつけています。

メフィスト 跡をつけてるっていうと、その二人を頼つてることかい？ だが、本当にやる気だったら、俺は独力で行くことを勧めるね。なにぶん自分で迷つてみなければ知恵は開けてこないからな。でもまあ行くがいいさ。行く先どうなるか見てることにしよう。

〔メフィストの前に、一人の哲学者、すなわち水生論者のタレスと、火成論者のアナクサゴラスが現れる。二人は論争中である〕

アナクサゴラス 燃える火山ガスがあつたればこそ、この岩も出来ているのだ。

タレス いや、湿気の中でこそ、あらゆる生物は発生したのだよ。

ホムンクルス 万物の生成を論じておられる賢人たちよ。どうか私を二人の傍に置いてください。私も何とかして出来上がりたいのです。

タレス ならば聞きなさい。自然の生き生きとした流れは、決して突発的な現象などではない。万物は規則的に少しずつ造成されるものであって、どれほど規模が大きくとも、それは爆発的に生じたものなどではないのだ。

アナクサゴラス ところが実際には爆発的に生じたんだよ。君は、真っ赤なマグマの爆発力が、たちまち新しい山をこさえたのを知らないのかね。（ホムンクルスに）お前は、隠者みたいに窮屈な生活をしているな。もし改心して爆発的に勇ましくなるというなら、私から王冠を授けてやつてもよいのだが。

ホムンクルス タレスさんのご意見は？

タレス アナクサゴラス君の勧告は支持できない。だって彼が言っていることは幻想に過ぎないのだから。お前は王者にならなくても幸せになれるだろう。

ホムンクルス うーん、こっちのほうがいいかなあ。

タレス どれ、これから陽気な海の祭りに行つてみよう。あそこには、珍奇な客を尊重する気風が残つているからね。（タレスとホムンクルスが立ち去る）

メフィスト ホムンクルスは行つちまつたか。俺も一緒に行こうと思ったのだが、近くの洞穴の奥に、妙に気になる三人分の人影が見えるんだ。薄暗がりのなかにしゃがんでやがる。（覗き込む）一目見て驚いた。負けず嫌いの俺でも、こりゃ白状せずにはおかれない。こんな醜い奴らは、ついぞ見たことがないと。フォルキュアス（＝一つの目玉と入れ歯を共有している三人の老婆）妹たち、ちょっと眼をお貸し。こんな近くまで、誰が来たのかを確かめてみるから。

メフィスト いま初めてお目にかかりますが、実を言うと、『三』方と私とは、遠い親戚にあたるんです。そして、あなた方の見た目の素晴らしいには、贅辞に足る言葉も見つかりません。ただただ恍惚としております。

フォルキュアス なかなか物が分かるようだね、この幽霊は。

メフィスト ところで『三』方は、一つの眼と一つの歯で、万事こと足りていらっしゃる。であれば、どうか三人分の実質をお二人に縮めていただき、三人目のお姿を、この私に貸していただきたい。そう、ちょっとの間のことなんです。

フォルキュアス どうだろう、いいかしら。うーん、いいわ、おやんなさい。

メフィスト（フォルキュアスの姿となり）これで俺は、混沌の秘蔵の息子となつたぞ。となれば俺は、これから、人目につかないよう隠れていなければならぬ。影の中から皆を驚かせてやるんだからな。（退場）

11 エーゲ海の岩の入り江

夜空に月がかかっている。

タレス（ホムンクルスに）お前をネーロイス爺さんのところに連れていくてやろう。あの人が住んでいる洞窟が近くにあるからな。もつとも、そのネーロイスはひどい頑固者で、手に負えないぐらい片意地な爺さんなんだが。

ホムンクルス 試しに門を叩いてみましようよ。どれほど偏屈な人が相手でも、すぐに私のガラスが割られることはないでしょう。

ネーロイス（洞窟から出てきて）俺の耳に聞こえるのは人間の声だろうか。どうも心の底から癪に障るんだが。

タレス ネーロイス、あなたは賢い方だ。どうか私たちを追い払わないでください。この光るガラス容器を見てみてください。人間に似ていますが、汚れなき光を放っています。そして彼は、あなたの助言に、すっかり従おうとしているのです。この子は健気にも「出来上がりたい」と申しているんです。

ネーロイス あっちへ行け。プロートイスのところへ行け。あの変化男に聞けばいいんだ。どうしたら出来上がったり、姿を変えたり出来るかをな（洞窟の奥に引っ込む）

タレス（ホムンクルスに）せっかくの段取りも無駄であつたな。ああ言われたが、プロートイスに会つても、すぐに消えてしまうだろう。あれは人を驚かすことだけが趣味のような男だから。でもお前は、切れ端のような助言でも必要としているのだから、試みに彼のもとに行つてみよう。（タレスとホムンクルス去る）

〔海原にプロートイスの声が響く。ただし、その姿は見えない〕

プロートイス（ホムンクルスを遠望して）ガラスの中に人がいるように見える。わしには、こんなのが嬉しいのだ。ヘンテコなものほどありがたい。

タレス プロートイス君、どこにいるのだ。

〔プロートイス、腹話術を使って、近くあるいは遠くにいるように声を発する〕

プロートイス ここだ。今度はここだ。

タレス（ホムンクルスに小声で）彼は本当は、すぐ近くにいるんだよ。君はひとつ、元気よく光を放つてみたまえ。プロートイスは好奇心が強いから、光を見ればおびき出されるに違いない。

ホムンクルス では思いきり光を出しましよう。ガラスが割れないよう用心しながら。

プロートイス（大亀の姿をとつて）その優美に光っている小人は何者なんだね。

タレス（ホムンクルスを手で覆い隠して）よく見たいならば、もつと近くに寄ってきてくれ。だが少しばかりの骨折りは嫌がらないで、どうか人間らしい姿になつておくれ。

プロートイス（上品な紳士の姿となつて）ははあ、燐光のように光る一寸法師なのだな。驚いた、こんなものを見られるとは思わなかつた。

タレス この子は、君の知恵を借りて出来上がりたいというんだ。まだ半分しか、この世に生まれていないそうで、精神の資格においては欠けるところはないが、他方、何としても肉体性が足りないというんだ。

プロートイス お前みたいなのを、本物の「処女の息子」というのだ。出来るはずのないものが出来たんだから。

タレス 超自然的といえば、この子は半陰陽（両性具有）もある。

プロートイス それなら上手くいくに違いない。ある段階に達すれば、どっちかの形が出来上がるだろう。

ホムンクルス 本当ですか。

プロートイス ああ。だんだん大きく育つていって、一段と完成するように成長すればよいのだ。そのためには、広い海でやりだすのがいい。お前を永遠なる水の世界に運んでゆくのは、プロートイスの海豚だ。（海豚に姿を変える。タレスとホムンクルスに）乗れ。

ターレス なんと美しい海原だろう。月明かりがそう見せているのだろうが、私は水成論者として、燃え上がるような歓びを覚えてきたぞ。全てのものは、やはり水から出来上がったのだ。全てのものは水によって保たれているのだ。海原よ、お前の支配をどこしえに続けてくれ。

ホムンクルス この慈しみぶかい水の国では、何を照らし出してみても、心を魅する美しさに溢れる。ああ、気持ちが高ぶつてくる。（一人はぐれて沖に向かっていく）

ネーロイス（今さら現れて）遠い海で神秘的に光るものは何だろう。勢いよく燃えたり、優しく愛らしく照らしたりする。まるで恋の脈拍を感じているかのようだ。

ターレス あれはホムンクルスだ。彼は、我慢できないほどの憧れを抱いている。もだえ苦しんでいる。呻きさえ聞こえてきそうだ。あれでは、自分を抑えきれずに碎けてしまうだろう。おお、燃えるぞ、光るぞ。もう割れたフラスコから、溶けて流れてしまっている。

〔ホムンクルス、わずかに明滅して海原に消えていく〕

戯曲「ファウスト第二部」上

著者 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
